無題

簾の内側で流されている血
風が通る
淀んだ匂いが飛ばされてゆく

見たのか
それとも見なかったのか
無関心の中に忘れてしまうのか

星々は厚い雲に隠されている
雨の気配だけがしているが
降ることはないだろう

薄黄色の LED が点滅している
置き去りにされた生命であるかのように
彼らは何時、再生を手に入れるのか

感じることが無意味であるという立証
それをひたすら数学的に企てている
そこにも美はあるらしい

返り血を浴びた私を断罪する者は居ない
カメラが向けられている
拡散そのものを目的として

私を食ってみるがいい
そして分析し、構築してみるがいい
再生という連鎖を

そのために必要なのは

天文学的な試行錯誤であり
永遠とも見える失敗の連続なのだ

滅ぼすこと
滅びること
その間に横たわるものこそが血である

(2011.7.7)